

方言と共通語

目標と振り返り

- 方言と共通語の特徴について知る。



地域によって、いろいろな言い方をしている言葉がある。中には、似ている言い方もあるし、全く違う言い方をしているところもあるんじゃない。



方言はどうしてできるか

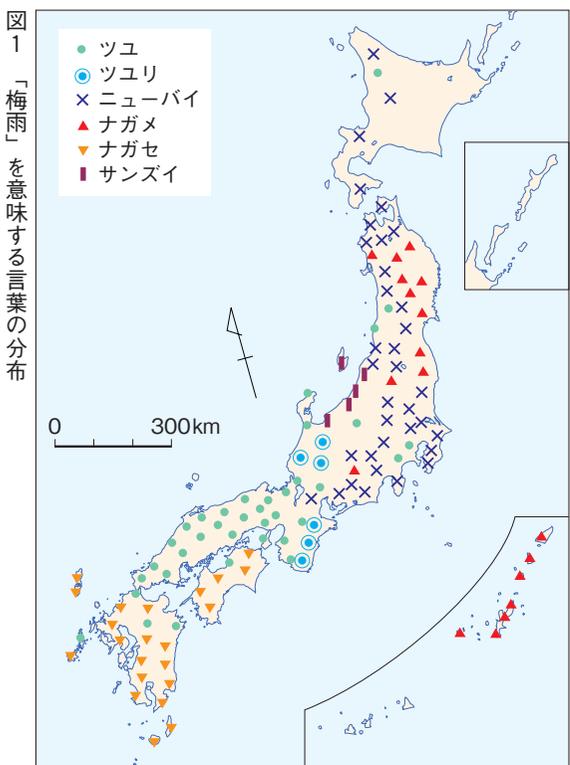


図1 「梅雨」を意味する言葉の分布

言葉は人と人をつなぐものです。近い所で生活している人の言葉が似ているのは、よく経験することです。逆に、別々の場所に暮らす人たちの間で、話をする機会がずっとなければ、二つの場所の言葉は、違うものになっていきます。このことがよくわかる例が、上の「梅雨」の地図です。

本州の東側では「×」の「ニューバイ」が多く使われ、西側では「●」の「ツユ」が多く使われています。

地域によって違いがみられる言葉を方言といいます。日本のどこでも、その土地の方言があります。

本州の東西の境目のあたりには、高い山脈や大きな川があり、交通手段のあまり発達していない時代には、人の行き来を妨^{さまた}げていました。そのために、東西で、使う言葉が違うようになったと考えられます。

方言のいろいろ

このような言葉の違いは、単語だけではなく、発音などにも現れます。

例えば、東京の人が「箸^{はし}」の意味で「ハシ」と言うと、大阪の人には「橋」に聞こえてしまうのは、アクセントが違うためで、これは発音の問題ということになります。

(↓ P 214 へ)

共通語の成り立ち

共通語は、東京の山の手の言葉をもとにつくられたといわれています。ところが、その東京の言葉には、もともと近畿^{きんき}地方の言葉が入っていました。

共通語で、「梅雨」や「行こう」というのも、近畿地方の方言が入ったものです。

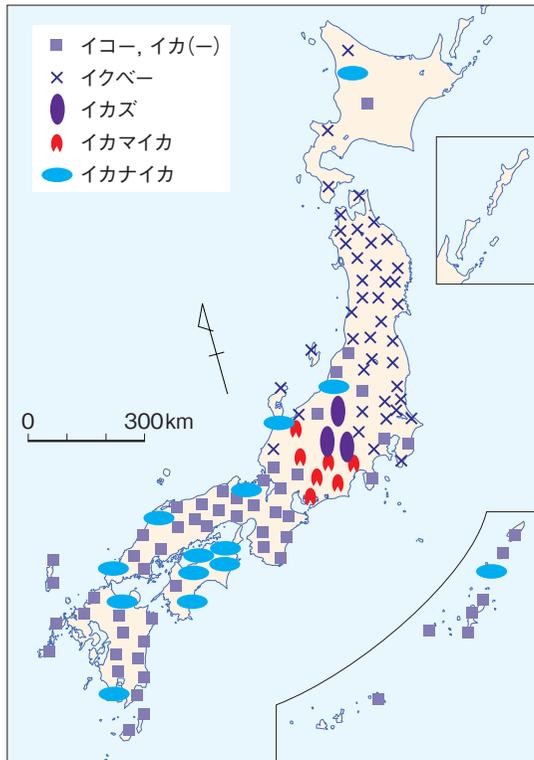


図2 「行こう」を意味する言葉の分布

方言と歴史

方言は長い時間をかけてできた言葉です。

次の「とんぼ」の地図を見てください。東北地方の一部に「アケズ」があり、奄美^{あまみ}や沖縄^{おきなわ}に「アケージュ」があります。これは、トンボの古い言い方である「アキ

15

10

5

「ツ」からきており、この古い言い方が、遠く離れたところに残っているものです。

もともとは、長い間文化の中心地であった近畿地方などを含む地域に、この言い方が広がっていましたが、ここに、あとから「トンボ」などの新しい言い方ができて、全国に広がっていったために、南北に孤立するようになったと考えられます。

このように、方言から日本語の歴史をたどることもで

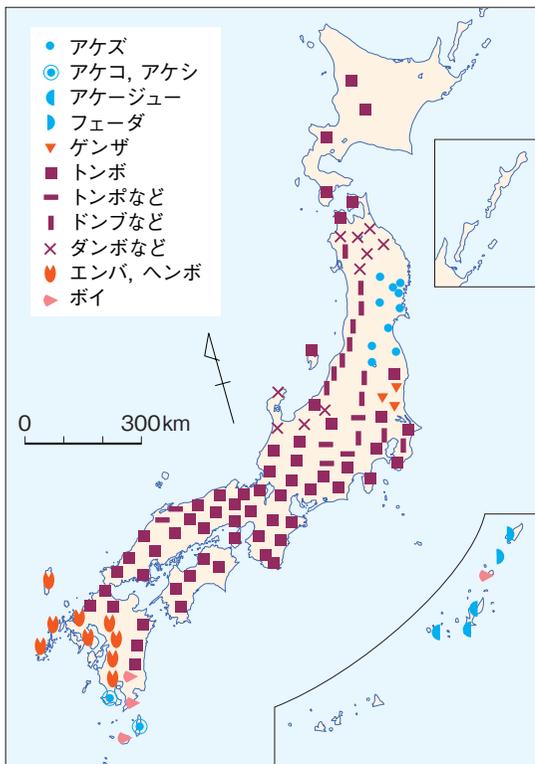


図3 「とんぼ」を意味する言葉の分布

きます。

新しい方言

方言には、古い言葉が残っていることも多いのですが、中には、近年、新しく生まれた言葉もあります。

大学に入ったばかりの学生のことを、関東地方では「一年生」と言い、近畿地方では「一回生」と言います。

今のような大学ができたのは明治時代ですから、このような言葉の違いは、古いものではありません。

社会方言

言葉の違いを生むのは、地理的な要因だけではありません。

ある航空会社では、「飛行機酔い」のことを「空酔い」と言い、別の航空会社では、「空酔い」と言うことがあります。

違う会社の人どうしでは、一緒に仕事をすることがないために生じるものです。

また、若い人が使っている言葉を、お年寄りが理解できないということも、よくあります。

このように、現代では、地理的な原因だけでなく、所属する団体や世代などの社会的な原因によって、言葉が違ふことがよくあります。これを社会方言といいます。

方言と共通語の使い分け

ところで、私たちは、方言だけで生活しているでしょうか。

現代の人は、方言と共通語を、相手や場面によって使

い分けているのが一般的です。例えば、家族と話すときは方言で、よそから来た人と話すときは共通語で、というぐあいです。

このような使い分けをするのが、現代の方言の大きな特徴といえます。

考えよう

(1) 自分たちの言葉で共通語と違うのは、どんな言葉か。また、発音や言葉の特徴（接続詞や文末表現など）についても考えましょう。

(2) 方言と共通語の使い分けがどのように行われているか、調べてみましょう。

*図1・3は「日本語語地図」（一九六六―一九七四年 国立国語研究所）をもとに作成。

*図2は「方言文法全国地図」（一九八九―二〇〇六年 国立国語研究所）をもとに作成。